

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第5号】
令和元年
9月2日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

安心・安全な学校

教育長

勝亦 重夫

今年、長い梅雨が明けるとともに、昨年を思わせる大変暑い夏休みとなりました。二学期がスタートして一週間が立ちました。長い休みの後で、特に大切なことは子供たちに早く生活のリズムを取り戻させることですが、いかがでしょうか。まだまだ残暑が続く体調管理が難しいですが、子供たちも先生方も健康で毎日過ごしていただければと思います。

人との関わりはどうあるべきか、集団に対して自分はどう関わるか、目標に向けて自分をどのようにつとめるか、学ぶべきことがたくさんあります。行事を通して、「個の力」と「集団の力」の二つが高められるように様々な仕掛けをお願いします。特に意識してほしいのは「取り残された子供をつくらない」ことです。「みんなで何かに取り組むことは、いろいろあるけれど楽しいな」という思いを持たせてもらいたいと思います。学級で、学年で、学校で、

子供たちの笑顔があふれる二学期にしていきましょう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
九月一日は「防災の日」で、各地で防災訓練等が行われます。「防災の日」は、一九三三年（大正十二年）九月一日に発生した関東大震災日にちなんで制定されたもので、台風の来襲が多いこの時期に、防災への意識を確認し備えを怠らないようにするために行われています。（すでにやられていると思いますが、主な「〇〇の日」のいわれについては、折に触れ子供たちと話題にしてほしいです。）

関東大地震は、正午近くの時間に発生し、百九十万人が被災し、十万人以上の方が犠牲となりました。正午近くの発生だったので火災が多く発生し犠牲者が増えたといわれています。私の明治生まれの

祖母は、生前この時の事をよく話してくれました。地震発生時、祖母はまだ子供で小山町に住んでいました。東京から離れていた小山町でも「ドン」という下から突き上げられる激しい揺れがあり、為す術もなく家の柱にしがみついた揺れが収まるのを待ったそうです。何度も何度もその話を聞かされたので、その時の怖さというものが相当なものだったことが分かります。

私自身の地震体験の記憶は何といっても八年前に発生した東日本大震災です。ちょうどその日は、北郷中学校の教頭として、三年生の「東京デイズニージー」への卒業旅行で生徒を引率していました。発生した時刻は、帰りの集合時刻の少し前で、すでに全員生徒が集合していました。「ゴー」という今までに聞いたことのない大きな不気味な音とともに、激しい揺れに襲われました。周囲の樹木は大きく揺れ、池の水は周囲に激しく飛び散りました。立つて

いることはできず、地面に身をかがめ揺れが収まるのを待ちました。

海沿いのデイズニージーなので、一番心配したのは津波の発生でした。気象情報で津波が来ないことを確認した後、全員バスに乗り、帰路に着きました。

帰る途中も時々余震があり、バスが大きく揺れました。また、困ったことに、首都高速が通行止めとなったため、一般道で、晴海埠頭や銀座、渋谷などをのろりと移動し、学校に戻ったのはすでに午前二時を回っていました。液状化現象や帰宅困難者であふれている町の様子は今でも忘れられません。

「災害は忘れたころにやってくる」使い古された言葉ですが、災害の本質を表しています。油断せず、日頃の備えをしつかりしておく必要があります。また、定期的な防災訓練を行っています。様々なシチュエーションを想定し、常に緊張感子供たちの持たせることが大切です。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
学校に子供たちの笑顔があふれるためには、「安心」と「安全」の両方が必要です。様々な角度から安心や安全について見直し、日ごろからの留意をお願いします。子供たちの

「安心」と「安全」の担保は、私たちが教職員にとって、一番の基本です。

御殿場市
教育フォーラム
2019

学校教育課主席指導主事

小林 徹

七月二十五日、御殿場市民会館等において市教育フォーラム2019を開催しました。市内公立幼・小・中学校教職員約四百七十名と、私立幼稚園や保育園・こども園・託児所等職員約三十名が加わり、市内の保育・教育に関わる約五百名が一堂に会し、終日、研修に励みました。

今回で七回目を迎える今年度は、「すべての子供に最良の学びを届ける御殿場の教育を目指して」を大会テーマとして、午前の部の全体会では、若林洋平市長の御挨拶、教育長の基調講話、「はごろも『夢』教育講演会を行いました。午後は五つの会場に分かれて分科会を実施しました。市長様からは、我々教員に対して、様々な面から、安心

して教育活動に邁進してほしいという励ましのお言葉をいただくと同時に、市長様の教育に対する理想と熱いメッセージをお話いただきました。



また、本年度より就任された勝亦重夫教育長からは、「第四次御殿場市総合計画」及び「御殿場市の教育に関する大綱の教育文化政策方針」である「富士山のように大きな心を持った人づくり」を進めていく上での基本方針を資料を使いながらわかりやすく解説いただき、本市教育に関する教育長のビジョンを市内教職員と共有する場となりました。アンケートには、

・市長、教育長の言葉も有り難く、市の教育目標を振り返ることができました。人としての根っこを大きくする教育を大切にしたい、というお話を聞き、信頼される保育者になりたいと思

いました。

・人として「信頼される」存在を目指したいと思いましたが、人権教育をもっと頑張っていきたいと思います。

など感想が寄せられました。

「はごろも『夢』教育講演会」は、東進ハイスクール・東進衛生予備校古文講師・吉野塾代表 吉野 敬介氏を講師に招き、「今がんばれないヤツは、一生、がんばれない！」と題し、御講演いただきました。

吉野氏の、生い立ち、生き方、特に大学受験を決意した経緯や予備校講師を目指したきっかけなど、大変興味深く、勉強になりました。大切な子供の将来を預かる我々にとって、吉野氏の話は、新学期から実際に子供たちと向き合う中で、多面的な視点から指導観を膨らめることに大変有効であったと思います。

・本心に夢中になって聞くことができました。熱い思いがよみがえる講演でした。まだまだ自分にとって不足していることが多いと思う日々のため、時間を理由にせず、今やることを精一杯頑張ります。吉野先生の熱い思いに感銘

を受けました。子供一人一人に真剣に向き合い、日々の保育、子育てを頑張ります。

・吉野先生の人間性、経歴、そこには悲しい物語あり、命の大切さを感じることができました。引き付けられました。

このような前向きなアンサー回答が多く、主催者として大変うれしく思いました。本フォーラムを起ち上げた意義や経緯を継承しながら、今日の教育課題にも対応しうる、充実したフォーラムにしていきたいと改めて考えました。

今後も、実行委員会、教育指導センターの先生方をはじめ、多くの皆様方に御協力いただき、「御殿場市教育フォーラム」を育てていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



A分科会 特別支援教育部会

A分科会は、常葉大学より赤塚めぐみ先生をお招きし、「発達障害児の多様性と個別の指導計画の作成と活用について」御講演いただき、研修を深めました。

インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の在り方から始まり、なぜ個別の教育支援計画や個別の指導計画が必要なのか、丁寧に説明していただきました。

「合理的配慮」や「ICFモデル」について確認し「特別支援教育の推進」について基本的な考え方を共有することができました。スタートとゴールは一緒だけれど、ルートは違っているという話に、一同大きくうなずき、思わず声が漏れました。

「個別の教育指導計画作成」の演習では、発達障害を抱える子供たちの目立つ行動に対して、どうしてなのか「環境」「原因」「背景」を探っていく活動を「ポジティブ支援シート」を使って考えました。行動を細分化することで目標の設定が見えてくることを学びました。また、教育相談の必要性とチームで対応していく

この大切さを学びました。個別の教育支援計画は保護者との協力のもとに作成されることを強く意識し、連帯感を持つことが重要です。「行動の細分化」を通して、保護者に提案できるツールとして、個別の教育支援計画を活用していきたいと思えます。



以下は、研修に参加された先生方の感想です。

- ・「Learning Differences」
と「言葉の胸」について
おきたいと思えます。
- ・立場が違えば目標や課題も
異なります。「学校」と「保
護者」、双方の思いを深く話
し合い、お互い歩み寄って、
子供のためになるような支
援を考えていきたいと思
います。
- ・教師目線ではなく子供目線
が大切だと実感しました。
- ・行動の細分化から介入の系

口を見つめ、二学期から実践してみたいと思えます。

【中西 直子】
B分科会 生徒指導部会

生徒指導部会兼第二回不登校等研修会は、常葉大学教育学部太田正義准教授をお招きし、「不登校やいじめの未然防止・初期対応について」という演題で、講義・演習を行いました。

太田先生は、県内各地でいじめ問題等の対策委員会の会長や委員を歴任されており、大学においては、思春期の子供たちの心の変化といじめや不登校、非行等との関連について研究されています。データに基づいた説得力のある資料を基にお話してくださいと共々、具体的な事例をあげながら、対話型のグループワークを設定してくださいました。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、学校教育相談員などにも参加していただき、事例について一緒に検討していただきました。

子供の発達・心の変化を念頭に置いて、いじめや不登校について考えていくというお話の中で、はっとさせられる

場面がいくつもありました。例えば、これまでは不登校について、「学校不適応」から「学校復帰」を目指そうとしていきましたが、学校不適応と考えるのではなく、成長と共に、学校以外の選択肢を求めようとする「適応行動」としてとらえていくことで、関わり方や支え方が変わってくるというお話がありました。

参加者からは、
・いじめや不登校に対しての見方や考え方が変わりました。成長によって悩み方が変わるといことは、対する大人の関わり方も変えていかなければいけないのだと思えました。

・生徒の健やかな成長を願っているのに、心の成長を理解できずに問題だけを見てしまっていることに気が付きました。心の成長を理解して、生徒たちと関わっていききたいと思えました。

等の感想が寄せられました。また、講義の最後に、教育学部の学生を対象にした調査から、「教職員を目指す人の五割から六割が、いじめの加害も被害も経験したことがない」とのこと、それが初動の遅

れや間違いにつながっている可能性もあると示唆されました。

私たち教師自身が、フレームにとらわれず見方を広げ、改めて子供たち一人一人の成長に目を向けていく必要があると考えさせられる時間となりました。



C分科会 授業改善部会

授業改善部会は、「学習の基盤となる資質・能力「情報活用能力」を育む「プログラミング的思考の育成」を研修テーマとし、高根愛郷会館にて行いました。講師は、株式会社アーテック教材事業部営業課 水谷 勝氏、講義・演習タイトルは、「アーテックロボの特徴と操作体験」です。

新学習指導要領では、情報教育の充実が示されていますが、中でも「プログラミング

的思考の育成」の導入が注目されています。それを受けて御殿場市では、市内すべての小学生（四年生〜六年生）がプログラミングの体験を行い、プログラミング的思考を養うことができるように、市内共通の教材を導入します。本分科会は、本市が実際に導入する教材の特徴や操作方法を学ぶ場として設定しました。

参加した先生方は、ロボットカーや信号機の動きを、コンピュータを使って実際にプログラミングし、自分が意図したとおりに動かしながら、プログラミングの概念や教材の特性等を学びました。

・とても楽しかったです。思い通りの動きをさせるために命令の順序を試行錯誤することが勉強になると感じました。

・プログラミングに抵抗を感じていましたが実際にやってみても楽しかったです。子供はどんどんやっていきそうです。

・子供に伝えていくにあたって難しく感じることもありました。自分たちも研修が必要になると感じました。これらは研修に参加した先

生方の感想です。先生方によって受ける印象は様々であるとは思いますが、現在各校に貸出している教材を有効活用し、研修を深めていってほしいと思います。学習指導要領の完全実施は目の前です。

【丹澤 謹志】



D分科会

園・学校保健安全部会

園・学校保健安全部会は、『いのち』の教育が「がん教育」の視点をふまえて」をテーマに、養護教諭として経験豊富で、大学で研究を積まれ多くの授業実践をされている元 尚綱学院大学教授 粉川 妙子氏より御講演をいただきました。

当日はまず、粉川先生から「がん教育」の捉え方についてお話を伺い、模擬授業を行いました。がんについての正しい理解だけではなく、有限の命に気付き、命の尊さを伝えることの大切さを学びました。

そして「子供の心に響き、心が動く」粉川先生の多くの授業実践を紹介していただきました。全体を通し、「がん教育」の目標である、健康と命の大切さについて主体的に考えることを改めて学ぶ、貴重な時間となりました。

受講された先生方の感想を紹介します。

・**模擬授業を通して、実践の様子がわかり、とても参考になった。グループ討議で幼小中の先生方と話ができてよかったです。**

・**がんについて教えていくことだけを考えていましたが、「いのち」の教育」といった視点を学ばせていただきました。**

・**命について、幼稚園の子供たちに伝えたい！」と強く思いました。心を大切に、存在を大切に、温かく保育したいと思えます。「あなたのことを大事に思っているよ」のメッセージをたくさん伝えたいです。**

今回の研修をきっかけとして、先生方が「がん教育」について考え、「いのちの教育」の積極的な実践へと発展することを期待しています。

【小見山 浩二】



E分科会 若手教員育成部会

若手教員育成部会は「授業力向上を目指して」道徳科を窓口として分科会テーマに、静東教育事務所地域支援課 参事 羽田 稔彦先生をお迎えして研修会を行いました。

前半は「道徳の授業づくり」を演題に羽田先生の講義を受け、後半は授業の実践記録の分析をグループになって行いました。

前半の講義では、道徳科授業の期待される姿を「リレー」ではなく、「玉入れ」のようにという例えで説明されていた。

した。

「リレー」とは、子供の意見をつなぎながら一つのゴールに向かってまっすぐに進んでいく授業のイメージです。それに対し、「玉入れ」とは、子供たちのそれぞれの意見（玉）が籠の中に次々投げ入れられていくイメージです。

籠の中では、いろいろな考えが混じり合います。自分の考えを自然に他と比べることになります。自分の考えがより明確に意識できるようになります。その結果、考えを見つめ直したり考え直したりする機会となります。

そのような授業を構築するためには、教師自身が内容項目を手掛かりにして、教材の道徳的価値を明確に持つこと（価値観）、内容項目と関連する子供の実態をとらえること（児童観・生徒観）、教材と子供の実態をつなげ、この教材でこの子たちに何をどう考えさせるのか構想する（教材観）を持つことが大事であることと話されました。

後半は三、四人のグループになり、実際の授業記録を読み合いながら、子供の実際の活動を通して道徳科授業につ

いて考えることができました。こんな感想がありました。

・**道徳授業に対しての基本的な考え方を改めて捉え直すことができました。「何について考えさせ、何に気付かせたいのかを明確に持たせることが大切」とあったが、そのためにはやはり教師自身が教材をじっくり読んで研究することが大切だと思ったので実践したいと思えます。**

・**道徳の授業について、価値の押し付けになってしまっているのではと悩んでいた部分について、とても分かりやすく教えていただきました。**

道徳科授業について、立ち止まって考える良い機会になったことと思います。

【高橋 正彦】

